「Teachers’　cafe」レポート

中村　淳（北海道・小学校）

１　チーム名　「ＳＴＡＰ細胞」　子どもたちが、小保方さんのように、未来を切り拓いてくことを願って

２　身に付けさせたい力　→自分の未来を創造する行動力

（１）背景　日本の人口構成など未来を予想させるものからみても、子どもたちが生きていく未来は、決して薔薇色ではない。初めて就職した職業を最後まで全うする子は何人いるだろうか。また、グローバル社会の進展により、多様な文化をもつ人と共に、持続可能に社会を作っていくことが求められている。このような状況において、学校には、子どもたち一人ひとりが、自らの人生を切り拓き、自分の納得する人生を送る力を育む使命がある。そのために、子供たちには、社会の進む方向性を想像し、様々な課題の解決に向かって、自分の知、社会の知を活用し、新しい解決の道を創造する力が必要となる。そして、それは「思考力」「判断力」「表現力」にとどまることなく、子どもの生き方をも見据えた人生の学びへのビジョンとなり、未来において自己実現するために自ら社会に働きかけ、自ら動く行動する力とならなければなせない。

（２）考えられる力

社会のめざす方向性を想像する力　→　自ら人生を設計する力（前向きに人生に立ち向かう）

様々な課題に向かう力　→　批判的・創造的な思考力、問題解決力

自分の知、社会の知を活用する力　→　情報リテラシー、コミュニケーション能力（母語と外国語）

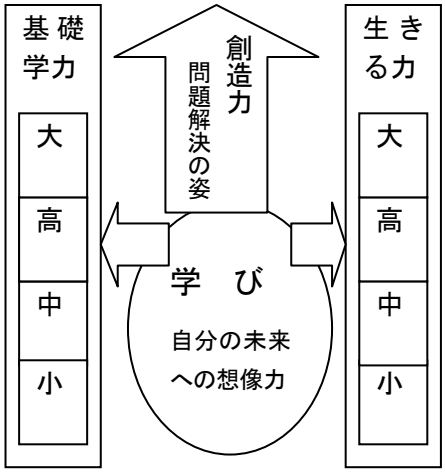
新しい道を創造する力　→　倫理観に基づいた地球市民としての行動力

（３）どう教えていくのか→学びの進化

従来、学校で求められていた学力は、知識を豊富に正確に把握して、与えられた問題を、正確に早く解くことを求めていた。しかし子どもたちが暮らすグローバル社会において、与えられた問題を効率よく解くだけでなく、自分の置かれた状況の中で、課題を把握し、自らがその課題に向かうことが求められる。また、その課題は、多様な文化を受容する倫理性が問われることになると共に、その問題解決にあたっては、多様な人々との対話的な解決が求められる。

そのため、学びでは、従来の基礎学力（知識）だけでなく、上記にあげた力をつなげ、行動として創造していくことが求められる。

また、その学びは、いかにその力を身に付けたということではなく、その力を活用して変化に対応したかによって評価されるものだと考える。




学びにおける基礎学力と生きる力との割合

| 小学校 | 中学校 | 高校 | 大学 |
|---|---|---|---|
| 学習習慣<br>基礎学力（リテラシー）<br>体験・本物との出会い | 地域社会への働きかけ | 地域社会での具体的な問題解決 | 社会（自己選択）への具体的な問題解決<br>ボランティアなどへの参加 |

基礎学力を培う

生きる力を試す

（４）その方法を実行するための条件

（ア）　「教える」から「学ぶ」への転換　　学びは、過去を学ぶものではなく、過去を土台に新たな解決方法を構築するところにある。

（イ）　教科の目標を内容理解と共に、生きる力の具体的な目標も含ませる。（ＣＡＮ・ＤＯ）→大学入試などの入学試験も変化してくはずである。

（５）我々が明日からすべきはじめの一歩

（ア）学ぶ意味を伝える。なぜ、学校で学ぶのか。その意味を伝えることが大切である。そのためには、子どもたちに、過去、現在、未来の時間軸を持つ中で、自分の未来　への見通しを持たせると共に、地域、県、国、そして地球という世界感の広がりを実感させることが必要だと考える。

（イ）小、中、高を見通した、新たな目標の設定。「育てる、気付く、～する」から、「〇〇のような問題に出会ったら、〇〇のような問題解決をすることができる。」へと目標を行動化する。